

第11回日本ウズベキスタン経済合同会議

はじめに

2013年3月5日、ウズベキスタン共和国の首都タシケントにおいて、「第11回日本ウズベキスタン経済合同会議」が開催されました。現地での開催は2007年10月以来、5年5カ月ぶりのことであり、日本側56名、ウズベキスタン側26名の計82名が参加しました。

合同会議には、先方会長であるアジモフ第一副首相兼財務大臣をはじめ、ガニエフ対外経済関係・貿易・投資大臣、サイドワ経済大臣等、ウズベク側要人が数多く出席し、貿易・投資の拡大、高度技術導入等を含む、日本との幅広い協力関係発展に対する熱い期待が語られました。一方、日本側は主要会員各社がウズベキスタンにおけるビジネスの実績と展望について報告、今後とも関係を継続・発展させていく意思を確認しました。

翌6日にはナヴォイ経済特区訪問、7日には自動車分野の人材育成のためにイタリアとの協力のもとに設立されたトリノ大学の視察が行われました。また、会議に先立つ4日には、両国政府および関係機関による「第2回日本ウズベキスタンビジネス環境に係るワーキング・グループ」が開催され、合同会議参加者の一部もオブザーバ参加しました。

以下に、会議の概要についてご報告致します。

1. 経緯

今回の第11回経済合同会議は、2011年2月東京開催の第10回から約2年を経て開催された。合同会議は通常、1年半～2年に1度のペー

スで行われるため、この間隔に何ら不思議はないのだが、その前の現地開催である第9回との間が約3年半あいていたことから、現地開催としてやや“ひさびさ感”があったことは事実である。

ただし、この経済合同会議の空白は、両国間の経済分野における交流の空白を意味するものではなく、むしろ逆だと言って過言ではない。2008～2010年にかけて合同会議が開催されなかった理由の一つに、「日本ウズベキスタン・ビジネスフォーラム」という枠組みがある。ウズベキスタンの独立直後に設立され、両国の官民におけるハイレベルの交流の場としての性格を強めてきた二国間経済委員会の合同会議に対し、より実務的なレベルでの意見交換を目的に2006年、日本側は経済産業省の主導で設立された。2009年までこのビジネスフォーラムがほぼ毎年、タシケントで開催されていたため、少なくとも日本側としては合同会議を従来ほど頻繁に開催する必要性を認めなくなっていた。

また、2010年はカリモフ大統領の訪日が予定されていたことから、双方ともその準備のため日本における活動に注力した。特に4月のウズベク政府主催国際コンフェレンス「日本のパートナーのためのウズベキスタンへの新たな投資チャンス」は、ガニエフ副首相兼対外経済関係・投資・貿易大臣（肩書は当時）他が来日し、400名もの参加者を得て盛大に行われた。この時には民間企業によるものを中心に、約20の協力文書が結ばれている。

翌年2月、実際の大統領訪日に合わせ第10回経済合同会議が開催された。また、経済産業

省とウズベキスタン対外経済関係・投資・貿易省の間で「貿易投資拡大のための協力に関する覚書」が結ばれ、「日本・ウズベキスタンビジネス環境に関わるワーキング・グループ」（以下、ワーキング・グループ）の設立が合意された。2011年6月に第1回がタシケントで開催されている。

この様に日本とウズベキスタンとの間に経済関係強化に関わる複数の枠組みが新設され、また重要行事が相次ぐなかで、ごく“自然に”遠のいていた合同会議の現地開催が今回実現したのは、第一には先方政府からの熱心な働きかけによる。以下に概要を示す通り、会議では貿易・投資の拡大、高度技術導入等を含む、日本との幅広い協力関係発展に対するウズベク側の熱い期待が、徐々に改善しない現状に対する不満と焦燥交じりに表されている。また第二には、経済委員会の日本側会長会社及び会長の交代という日本側のタイミングもあり、この度の第11回合同会議開催に至った。

2. 合同会議概要

会議は、ウズベキスタン日本経済委員会会長としてウズベク側議長を務めるアジモフ第一副首相兼財務大臣の開会挨拶で幕を開けた。ウズベク経済の現状と課題を概説しつつ、日本企業進出への期待、日本との協力の必要性を訴える事実上の基調報告であった。終了後同氏は退席し、以降の議長はガニエフ対外経済・投資・貿易大臣が務めた。

続いて日本側議長である関山・日本ウズベキスタン経済委員会会長（丸紅㈱副社長）の開会挨拶の後、双方の報告が始まった。初めはサイドワ経済大臣で、所謂「ウズベク・モデル」に基づく自国の経済政策を称え、順調な発展ぶりを伝える伝統的内容であった。同氏によればウズベキスタンは2005年以来、年率7%以上の経済成長を続けており、2012年のGDP

対前年比増加率は8.2%である。インフレ率は年末比で7.0%に抑えられており、今後はさらに6%台に低下する。財政は2005年以来黒字、貿易も恒常的に黒字、金・外貨準備は過去5年間で6倍以上に増加した。また、現行の重要政策として、「2011～2015年工業近代化・インフラ発展プログラム」が紹介された。当該期間中に約473億ドルを投じて519の大規模工業プロジェクトの実現を目指すもので、高度技術を伴う日本の投資・資金協力に対する強い期待が述べられた。2003～2012年累積のアジア諸国からの投資の7割を中国が占めるのに対し、日本からはわずか5%に過ぎない。世界の先端を行く日本の技術をウズベキスタンに導入したい、との希望は常々カリモフ大統領が口にするところであり、日本側はこれに答えてくれるものと期待している。

続いて関山会長が、「日本とウズベキスタン共和国との貿易・経済及び投資協力の現状と発展の展望」と題する基調報告を行った。要人往来や会議の開催等、各方面での交流が活発であるにもかかわらず、貿易・投資においては徐々に進歩がみられない現状を率直に認め、この会議が今後の関係発展の契機となることに期待を表明した。

次に対外経済・投資・貿易省傘下の貿易投資促進機構「ウズインフォインベスト」のダダハノフ総裁より、ウズベキスタンにおける外資の活動状況と、近年の投資環境改善に係る取り組みの現状が紹介された。同氏によればウズベキスタンは現在、従来の外国投資家に対する各種優遇措置に加え、企業活動に係る負担軽減を目的とした制度改革に注力している。2012年だけで大統領令により80の許認可手続きと15のライセンスが廃止された。また、具体的な外資系プロジェクトの例が紹介されたが、日本からの直接投資はきわめて少なく、2012年の外国投資に占めるシェアはわ

ずか0.6%に過ぎないことが指摘された。

続く津田・経済産業省ロシア・中央アジア・コーカサス室長は、安倍新政権の「三本の矢」等の経済政策の概要を紹介するとともに、両国経済関係発展のため、投資環境整備と外国投資家保護、日本企業に対する優遇策の検討等においてウズベキスタン側に一層の努力を求めた。

以降は、日本側は政府機関からJICA、民間企業からは豊田通商、三菱商事、NECが、それぞれのウズベキスタンにおける活動の紹介を行った。一方、ウズベク側は各セクターを管轄する国営企業あるいは企業協会の代表が、日本との協力の可能性に関するプレゼンテーションを行った。

電力分野からはイサクロフ・ウズベクエネルギー総裁が、JICAやNEDOとの協力で進行中の既存発電所の改修・整備プロジェクトの実例を紹介し、日本のハイテク技術の継続的導入の希望を語った。石油・ガス分野からはファイズラエフ・ウズベクネフチェガス総裁が出席、ユーロ4～5基準に対応するための製油所改修等、日本企業の参入を希望する具体的プロジェクトの提案を行った。また軽工業分野を管轄する国営企業「ウズベクエンギルサノアト」のハイダロフ総裁は、国内繊維産業の現状を説明し、日本製の紡績・縫製機械導入の希望を語るとともに、日本企業に現地生産への参入を提案した。化学分野の国営企業「ウズキミョサノアト」のシェルマトフ総裁は、2015年までの化学工業発展プログラムについて説明、ナヴォイ州におけるアンモニア・プラント建設、無機肥料生産、メタノール生産等のプロジェクトへの日本企業誘致を希望した。マブラノフ地質・鉱物資源国家委員会副議長は、ウズベクの地下資源について紹介し、日本との協力においてはウラン、レアアース・レア金属の開発が有望との見解を示した。自動車分野

の国営ホールディング「ウズアフトサノアト」のサリモフ副総裁は、ハイテク技術を利用したブレーキやワイパー、シートベルトの製造のために日本のパートナーを探していると語った。最後に家電協会「ウズエルテフサノアト」のシャヒモフ局長が家庭用冷蔵庫、洗濯機、掃除機等の現地生産への参入を提案した。

会議の締めくくりに、両議長が閉会挨拶を行ったが、ガニエフ大臣からは合同会議を毎年開催したいとの意向が述べられた。

会議後、隣接する国際ホテルに場を移してウズベキスタン側主催のレセプションが行われた。退席していたアジモフ第一副首相も戻り、冒頭では合同会議議定書の調印式が行われた。会食ではウズベクの伝統料理がふるまわれ、民族音楽、舞踏で歓待された。

3. ナヴォイ経済特区視察、他

翌日は早朝の便でタシケントを立ち、ナヴォイ経済特区およびブハラの視察に赴いた。ナヴォイでは、経済特区管理棟で特区の制度と現状に関する説明を受けた後、既に生産段階の企業のうち3社：①UAE合弁「アグロフレッシュ」社（農産物保冷倉庫業）、②韓国合弁「エライ」社（GMウズベキスタン向け自動車用銅線製造）、③インド合弁「ウズミンダ」社（計測器等、自動車用部品製造）を訪問した。当局が力説するように、広大な特区には確かにまだまだ進出の余地があるようだ。

視察後、車両でブハラに移動し、市内を視察した。同日はタシケントから終日トゥリャガノフ対外経済関係・投資・貿易省次官が一行に同行、各地ではそれぞれの州知事が出迎えてくれるなど、ウズベク側の対応は熱意とホスピタリティにあふれるものであった。

翌日はタシケント郊外の「GM パワートレイン」社（GMとウズアフトサノアトによる

合弁企業。小型エンジン製造) 視察の予定が、市内の「トリノ大学」訪問に急遽変更となった。主に GM パワートレイン向けの人材育成のため、イタリアのトリノ総合大学との協力により 2009 年に設立された単科大学で、1 学年約 170 名が在籍、イタリアから教授陣を招き、英語で教育を行っているという。平日にもかかわらずほとんどひと気が無く、設備の整ったまことに美しい大学であった。

4. おわりに

まずこの場をお借りし、今回の第11回日本ウズベキスタン経済合同会議開催に当たり、ご協力いただいた両国の関係各位に事務局より感謝申し上げたい。ひさびさの現地開催であったためか、特にウズベキスタン側の熱意には並々ならぬものがあり、準備に費やされた多大なる労力に敬意を表する。

ただし、こうした大規模な会議は本質的に“祭り”である。二国間経済関係の真実は、言わずもがなのことながら華やかな祭りの場ではなく、地味な日常の取引や交渉、対立と和解、成功やトラブルの狭間にあるのだ。

今回、合同会議に先立つ3月4日に、両国政府・関係機関による第2回「ワーキング・グループ」が開催された。貿易・投資環境整備のた

めの定期的協議の場であるべきこの会議が2011年6月の第1回から1年半以上も開かれなかったのは、現地の投資環境に関する両国の理解に大きな隔たりがあったためだとして過言ではあるまい。外貨交換規制をはじめ、同国の投資環境に制度的問題があると指摘する日本側に対し、ウズベク側は制度には問題が無く、トラブルが生じるならそれは制度適用上の個別のエラー、すなわち事故であると説明する。今回の協議においても両者の立場は必ずしも近づいたわけではなかったが、注目すべきは日本側がワーキング・グループの下に新たに現地における「実務者連絡会」の設立を提案、双方がこれを検討することで一致したことだ。つまりその内容・スキームについては今後の検討に委ねられるわけであるが、少なくとも日本側の意図するところは、より日常的な意見交換の場の設定であろう。

停滞している両国間の貿易・投資の現状を打開するには、特に阻害要因に対する共通理解の構築が必要であろう。上記連絡会をはじめとする双方の日々の粘り強い努力の積み重ねが、次回合同会議開催のためのより良い環境の醸成につながることを期待したい。

(輪島 実樹)

第11回日本ウズベキスタン経済合同会議プログラム

日付	時間	プログラム
3月5日 (火)	15:15- 15:30 15:30- 15:40 15:40- 16:10	<p>◇第11回日本ウズベキスタン経済合同会議◇</p> <p>〈於：インターナショナルビジネスセンター7階 ナヴォイホール〉</p>
	16:10- 16:20	<p>開会挨拶：アジモフ・ウズベキスタン日本経済委員会会長/第一副首相兼財務大臣</p> <p>開会挨拶：関山護・日本ウズベキスタン経済委員会会長/丸紅㈱代表取締役副社長執行役員</p> <p>サイドワ・ウズベキスタン共和国経済大臣</p>
	16:10- 16:20	<p>「2012年のウズベキスタン共和国マクロ経済発展の成果」</p> <p>関山護・日本ウズベキスタン経済委員会会長</p>
	16:20- 16:45	<p>「日本とウズベキスタン共和国との貿易・経済及び投資協力の現状と発展の展望」</p> <p>ダダハノフ「ウズインフォインベスト」総裁</p> <p>「ウズベキスタン共和国における投資環境改善に関わる諸方策と、 ウズベキスタンと日本の間の投資協力発展の展望」</p>
	16:45- 16:55	<p>津田隆好・経済産業省ロシア・中央アジア・コーカサス室長</p> <p>「日本の新経済政策と対ウズベキスタン関係発展の展望」</p> <p>三竹英一郎・(独)国際協力機構 東・中央アジア部次長</p>
	16:55- 17:05	<p>「ウズベキスタン共和国におけるJICAの活動について」</p> <p>イサクロフ国営株式会社「ウズベクエネルギー」総裁</p>
	17:05- 17:15	<p>「電力分野における日本とウズベキスタンの協力発展の可能性」</p> <p>ファイズラエフ国営ホールディング会社「ウズベクネフテガス」総裁</p> <p>「ウズベキスタン共和国の石油ガス・ポテンシャルと 石油ガス産業における日本企業との協力の有望な方向性」</p>
	17:15- 17:25	
	17:25- 17:40	◆コーヒーブレイク
	17:40- 17:50	<p>古林清・日本ウズベキスタン経済委員会副会長/豊田通商㈱顧問</p> <p>森輝幸・豊田通商㈱ 海外地域戦略部新興地域戦略室室長</p> <p>「ウズベキスタン共和国における豊田通商の活動について」</p>
	17:50- 18:00	<p>ハイダロフ国営株式会社「ウズベクエンギルサノアト」総裁</p> <p>「ウズベキスタン繊維分野における投資可能性と日本・ウズベキスタン協力の展望」</p> <p>シェルマトフ国営株式会社「ウズキミヨサノアト」副総裁</p> <p>「ウズベキスタン化学分野の投資ポテンシャル—日本企業との投資協力の展望」</p>
	18:00- 18:10	<p>中原秀人・日本ウズベキスタン経済委員会副会長/三菱商事㈱代表取締役副社長執行役員</p> <p>三好博・三菱商事㈱欧阿中東CIS統括補佐(トルコ・中央アジア・コーカサス)</p> <p>「ウズベキスタン共和国における三菱商事の活動について」</p>
	18:10-	<p>マブラノフ・ウズベキスタン共和国地質・鉱物資源国家委員会副議長</p>

	18:15	「ウズベキスタンの鉱物資源基盤における日本企業の新しい投資可能性」 サリモフ株式会社「ウズアフタサノアト」副総裁
	18:15-	「自動車製造分野における日本とウズベキスタンの協力の有望な方向性」 シャヒモフ「ウズエルテフサノアト」協会局長
	18:20	「ウズベキスタンの家電製品分野における日本企業との協力における投資可能性」 伊藤慶多・日本電気(株)米州EMEA営業本部統括マネージャー/
	18:20-	民田喜一・NECタシケント駐在員事務所首席駐在員
	18:30	「ウズベキスタン共和国におけるNECの活動について」 日本側閉会挨拶: 関山護・日本ウズベキスタン経済委員会会長
	18:30-	ウズベキスタン側閉会挨拶: ガニエフ対外経済関係・投資・貿易大臣
	18:40	
	18:40-	
	18:50	
	18:50-18:55	
	18:55-	
	19:00	
	19:30-21:00	【署名式】 第11回経済合同会議議定書 【ウズベキスタン側主催レセプション】 <於: インターナショナルホテル クリスタルボール・ルーム>
3月6日 (水)	06:35	タシケント発(HY1349)
	07:30	ナヴォイ着
	08:20-12:00	◇ナヴォイ経済特区視察(空港ロジスティクスセンター、経済特区内企業訪問)
	12:00-13:00	◇ナヴォイ州政府主催昼食会
	13:00	ナヴォイ発(車両)
	15:00	ブハラ着 / エサノフ・ブハラ州知事による出迎え
	15:00-18:00	◇ブハラ視察
	18:00-19:30	◇ブハラ州政府主催夕食会
	20:20	ブハラ発(HY1338)
	21:45	タシケント着
3月7日 (木)	10:30-11:00	◇トリノ工業大学視察
	13:00-14:00	◇日本大使館主催昼食会